

「蕪村と京都」

松本 節子 (摂南大学外国語学部教授)

与謝蕪村は、享保元年（一七一六）摂津国東成郡毛馬村（現、大阪府都島区毛馬町）に生まれ、天明三年十二月二十五日（一七八三）京都の自宅（京都仏光寺烏丸西入ル町）で六十八歳で没しています。墓所は、京都市左京区一乗寺才形町にある金福寺にあります。その生涯は、二十歳のころに江戸へ、以後三十六歳で上京するまで江戸・東北を漂泊します。三十六歳から亡くなるまでの三十三年間は京都の住人です。その間、官津へ三年余・讃岐へ四年出かけているが、妻子を京都に置き、結社もそのままなので、まさに出かけていたのです。

本日は、そんな蕪村の  
1、京の住所

2、住所と蕪村の句・画の関わり

3、京を題材とした句

について話をし、「京都が育てた蕪村」という話しをしたいと思います。



1、蕪村の京の住所

① 宝暦元年（一七五一）、蕪村は上京した。宛名は不明だが、世話

になっていた結城の二世晋我宛と推測されている書簡に

「 榎木町  屋與八殿迄 右之処付に而御登可被下候」と記している。まだ住所が定まっていないので、榎木町の  屋與八殿処付けで手紙をだしてください、という意である。「此書付壁に張付被差置、無御失念御登せ可被下候」と所書きをなくさないようにと念を押している。上京直後の近況および依頼をした書簡である。榎木町は、丸太町通りより一筋北の通りで、烏丸通りから西へ千本通りまでである。住所とはいえないが関係深い所番地として挙げる。

② 最初に居を定めたのは、「東山麓に卜居」である。「卜居」というのは、占って居を決めることだが、実際に占ったのではないでしょう。「東山麓」のどこかはわからないが、知恩院の近辺ではないかと推測する。なぜなら、蕪村は当時「釈蕪村」（「北寿老仙をいたむ」）、「東都襄道人蕪村」（『古今短冊集』の跋文）とか「野納」（書簡）などと僧としての謙辞を使っており、また、下館滞在中に世話になった弘経寺との関係で浄土宗の僧籍をもっていたといわれているので。そして、つぎに述べることは全く根拠がないことだが、もしかしたら上田秋成が寛政五年（一七九三）に六十歳で妻と二人で上京して住んだところの「華頂ノ麓」である「知恩院門前袋町」にある知恩

院前の長屋ではなかったかと想像するのである。同系列の文人が、上京後初めて住む場所として同じところというのも四十年余の時差はあるが、考えられないことでもない想像をたくましくするのである。池大雅の住所として、明和五年の『平安人物志』に出ているところである。

③ 次に蕪村の住所がはっきりするのは、明和五年（一七六八）三月刊の『平安人物志』である。蕪村五十三歳。画家の部に「四条烏丸東へ入ル町」と出ている。

④ 明和七年、五十五歳。夜半亭二世を継いだころに転居をしたようだ。「室町綾小路下ル町」。

⑤ 安永四年十一月刊の『平安人物志』（画家の部）に「謝長庚 字春星 号三菓 仏光寺烏丸西江入町」と出ている。六十一歳。二〇〇六年七月十五日の「日本経済新聞」によれば、蕪村は、安永七年七月、新町通四条上ルの山鉾「放下鉾」の下水引の下絵を描いている。この住所に住まいしていたときのことになる。

⑥ 天明二年の『平安人物志』にも「仏光寺烏丸西へ入ル町」として出ている。六十七歳。

以上が、現在判明している蕪村の京都居住地です。「東山麓」以外は、京都の市中の真ん中あたりに住まいしていたといえます。

## 2、住所と句・画

次に、蕪村の住所が句・画と関わりをもっているものがあるのか、という点で考えてみる。

明和六年の作とされる句に「桃源の路次の細さよ冬ごもり」という句がある。桃源郷、すなわち理想郷への道の細さよ、冬ごもり所は、という句である。中国六朝時代の詩人陶淵明の「桃花源記并詩」

は、武陵（湖南省）の漁夫が桃林中の細い道を辿り、仙境に至るという内容だが、その仙境がすなわち桃源郷なのである。「桃花源記」に「初めは極めて狭く、纔かに人を通ずるのみ。復た行くこと数十歩、豁然として開朗す」とある。「桃源の路次の細さよ」に該当する状況である。「路次」は「ろし」と読んで桃源郷への道中とする。しかし、字面から京都の市中に多い路地を読む者に連想させる。路地の奥の桃源郷のような住まい、ということである。初五・中七では桃源郷への道と読んで読んでいたのであって、そこに、切れ字の「よ」で、芝居の背景をひっくり返すようにパタリと場面が転換するのです。桃源郷のような家で、雑事から逃れての冬籠りへの期待を表現したものである。当時住んでいたのは、「四条烏丸東へ入町」です。四条烏丸を少し東へ入ったところ、借家で、商人でもない蕪村はやはり句のように路地の奥に住んでいたのでしょうか。現在でも、そういう雰囲気があるが、当時は四条通りから路地をスーと入ると静かな雰囲気をもった空間だったと想像される。

この句は、初五・中七に詠んでいるのは、中国の「桃花源記」の桃源郷なのである。そして、切れ字の「よ」でパタリと場面が四条通から路地に入った奥の家に転換すると上に述べた。蕪村は、後でも記述するが、古文辞派の漢詩人たちの影響を受けている。古文辞派の日本の詩人たちは、「日野龍夫『江戸とユートピア』が指摘するように、「演技の文学」という性格があったからであろう。実際に見ているものは、江戸時代の日本の風景であるのに、時間的にも空間的にも遠くはなれた（中国の）情景が作品のなかでは詠まれるのである。」（杉下元明、『江戸漢詩』）。蕪村も「蕪村調の際だった特徴として、古文辞派の漢詩の詩想・素材・用語の摂取が挙げられることは、周知の通りである」と日野龍夫氏は「蕪村と漢詩壇」で述べられている。蕪村は、古文辞派詩人とは逆に、中国の詩文の内容を詠

んでいると思わせながら、じつは日本の、四条通の路地の奥を詠むのである。古文辞派詩人と詩想・素材・用語を共有しながら、表現は逆なのである。

同じ明和六年に、同じ「冬籠」の兼題で詠まれたと考えられる作に「戸に犬の寝がへる音や冬籠」がある。夜遅くまで仕事をする作者に、土間で犬の寝返る音が聞こえる。冬の夜の穏やかな空気が感じられる。この句も「桃花源記」の「鶏犬のこえ相聞こゆる」桃花源の道具立ての一つである犬を使って、「桃源の路次」句と同趣向である。

蕪村の画にも「桃花源記」を材料とする「武陵桃源図」が五図ある。「武陵桃源」というのは陶淵明の「桃花源記」の内容が、武陵(湖南省)の漁夫が桃源郷に至るので、「武陵桃源」と言うのであって、『陶淵明集巻5』や子供向けの啓蒙書である『蒙求』に出ている。五図を掲げる。(一)の中に画の説明を書いた。いずれも講談社『蕪村全集六』に拠る。

(図1) 明和二年十月(一七六五) 作(桃源郷の村内の様子)

(図2) (宝暦八〇明和六年)、(桃林を伝つての桃源郷への道)

(図3) 安永十年二月作(一七八二) (双幅、賛に袁宏道「入桃花源詩」五言律詩四聯が書かれる。仙境での人々。左幅に五人、右幅に三人の人物が描かれる)

(図4) 天明元年作(一七八一) 六月(一幅、賛に袁宏道「入桃花源詩」五言律詩一聯が書かれる。漁夫がまさに桃源郷への「洞」を潜り抜けようとする図。島原角屋蔵)

(図5) 落款なし。(桃の木と並木道に人家がある桃源郷への図) 画かれているのは、いずれも「桃花源記」の内容の画面である。いわゆる漢画である。「桃花源記」と「桃源の路次の細さよ冬籠り」句



図1



図4



図2



図3



図5

のような関係は、直接にはこれらの画に関しては考えられない。

「武陵桃源図」に言及したので、ついでに気のついたことを述べておきたい。(図3)と(図4)の賛であるが、陶淵明の「桃花源記并詩」ではなく、袁宏道の「入桃花源詩」四聯であり、一聯である。『袁中郎詩集』の和刻本は、元禄九年に出版されている。蕪村は、若いころに江戸に滞在した折に服部南郭に師事したと言う。そして、古文辞派の漢詩の詩想・素材・用語の摂取が挙げられることは上に述べた。古文辞派とは、詩は盛唐以前のものを模範とする派である。また、田能村竹田の随筆『屠赤瑣瑣録』卷三には「翁(菅茶山)又云ふ、……蕪村には毎度葛坡先生の宅にて出會す、され共翁も其時は少年にて事を慢り、遂に一度も挨拶もせずして過す、残念なる事也。」とあって菅茶山が古文辞派の儒学者高葛坡の京の塾で、蕪村に常に出かけたという。蕪村は古文辞派の儒者の高葛坡のところに出かけていた。親交が深かったということである。しかし、袁宏道は、反古文辞派の評判の明の詩人である。安永十年・天明元年(四月に改元)ごろは、古文辞の流行が過ぎ、反古文辞派が好まれた時期である。蕪村もその波に乗ったということだろうか。

### 3、京を題材とした句

蕪村には京を題材とした句が多い。たとえば、

春水や四条五条の橋の下

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

羽織り着て綱もきく夜や河ちどり(一条戻り橋)

名月や神泉苑の魚躍る

栗島へはだし参りや春の雨

など市中とおぼしきところもあれば、

とろろ汲む音なしの滝や夏木立（大原の音無滝）

岩倉の狂女恋せよほととぎす

水一筋月よりうつす桂河（戸無瀬の滝）

苗代や鞍馬のさくら散にけり

洛東のはせを庵にて目前のけしきを申出侍る

そばあしき京をかくして穂麦哉（左京区一乗寺の金福寺芭蕉庵）

などの郊外を詠んだ句も多い。もちろん単に地名を詠んだ句という以上に、それぞれの句の趣向があるのであるが、ここでは、蕪村の出自に関係するような農産物を詠んだ句をあげて、蕪村の詩想の特徴の一端を考えてみたい。蕪村は大坂毛馬村の出身でその家は「村長」である裕福な農家であったと言われている。

(1) かも河のほとりなる田中といへる里にて

ゆふがほに秋風そよぐみそぎ川

句意は、夏越しのみそぎをする鴨河のほとりの村では、夕顔が秋風にそよぎゆれている、という意味になろう。

この句の前書きは、『蕪村自筆句帳』『蕪村句集』ともに書かれている。ということ、句との関わりの上で必要な前書きであるということである。すなわち、「かも河のほとり」にある「田中といへる里」のイメージで作句されているのである。なぜ、こんなにくどく前書きのことを言うかといえは、実は句の解釈に関わるからである。場所というものは、常にイメージが伴うと私は考えている。

「田中」は、「鴨川のほとり」で、今出川「大原口」から鴨川を東に渡った辺りである。高野川沿いに歩む若狭街道の起点であり、蕪村社中が芭蕉庵を建立した金福寺のある一乗寺村への道筋でもある。現在のことで言えば、京阪電鉄の終点「出町柳」近辺である。田中

村は、『雍州府志』（貞享三年刊）という京都のことを書いた地誌の「土産部」農産物について書かれた項に、壺蘆（別名、瓢箪、ふくべ）の特産地として挙げられている。特に、茶人が好みの形の茶具（炭取り）を作るために、まだ熟さない実を縄でしばって好みの形に作り上げる所として。

当句の解釈として、今、問題にしていることは、「ゆふがほ」が花ではなく実であることである。この句は、夏越し六月晦日の句であるため、夏の句としては「夕顔の花」が約束であるが、「秋風そよぐ」季節との狭間の句であるので、「実」であっても差し支えないと思う。むしろ季節の狭間で次の季節のものを出すことによって季節感を先取りする。

当句で詠まれている「ゆふがほ」は、実なのである。夕顔の実は、秋に収穫するのであるが、六月の晦日にはどのような状態だろうか。国宝の久隅守景画「夕顔棚納涼図」は、たわわに実る夕顔の棚の下で、親子三人が裸に近い姿で夕涼みをする図である。満月が出ている。八月十五夜では裸の夕涼みは涼しすぎる。画は七月十五夜ごろである。夕顔の実は十分に成長している。

作者蕪村が前書きの「田中といへる里」を置いた理由は、前書きがもしなければ、この句のイメージは、『源氏物語』夕顔の巻ゆかりの五条あたりになってしまうことにある。

久隅守景の「夕顔棚納涼図」は、木下長嘯子の「夕顔棚の下すずみ 男はててれ女はふたのもの」によることは周知のことであり、同じ題材で、句・画が多く作られ画かれている。この句を作るに際し、画家である蕪村の脳裏に守景の「夕顔棚納涼図」が浮かんだことは否定できないであろう。蕪村には上の長嘯子の歌を典拠とした句はないけれども、弟子の几童には次の句がある。

女は二布して四下冷す清水哉

女は二布して蚊やりたく小家哉

「二布」は「ふたの」と読み、女性用の腰巻のことである。

(2) 箒や垣のあなたは不動堂

この句の載る『新華摘』は、蕪村が、安永六年に一日十句を夏安居として自己に課した句日記で、その中の四月十一日の句である。夏安居とは、僧が夏の三ヶ月間を修行のために一室に籠って修行することである。蕪村は、昔修行した僧侶としての意識があったのであろう。

初五は、「たかなや」と読んでいる。「箒」なので大方の解説書には、京都郊外の西山辺りの景とし、不動堂は不動尊を祀る不特定の堂宇とする。

そうだろうか。安永六年には、蕪村は仏光寺烏丸西入ルに住んでいる。京には、不動明王を祀るところが多い。京都の地誌『都すゝめ案内者』正徳五年（一七一五）刊行には、京の「名不動」十一をしるし、その中の七つを「名不動七ヶ所まいり」として挙げています。

一番 ふどうゐん 六かくだうの内

二番 ふどうだう 七条油小路

三番 とうじ 大しうしろ堂

四番 ふどうゐん たけだ

五番 みやうわう院 松原白山角

六番 ふくしやう寺 出水通千本西へ入ル

七番 長ふく寺 同今出川上ル丁

京都で「不動堂」とのみ言った場合、それは、七条油小路の明王院不動堂のことではなかっただろうか。「智証大師作」(『都すゝめ案内者』)の石不動で、「俗にふんどんだうと云」(『京町鑑』)われて親しまれていたのであった。七条油小路の明王院不動堂は、伏見への通路としてよく利用されていた油小路に面している。

不動堂の境内に筥が出ています。垣のこちらからちよっと手を伸ばして採りたいけれど、お不動さんのあの大きな目でにらまれそう、という意であろうか。蕪村は、筥が好きだったようで、贈られた筥のお礼の書簡が幾通か残っている。

当句の収まる『新華摘』は、四月八日に始まり、二十四日で中断している。理由は、体調不良というように書かれているが(刊行の際の月溪の跋文)、娘くのが体調不良で婚家先から戻ったことに原因があったようである。同じ安永六年の作に

粟島へはだし参りや春の雨

と

摂あえぬはだし詣りや皐雨

がある。粟島は、和歌山市の加太神社ではなく、分祀した京都の岩上通塩小路にある粟島明神を祀る粟島堂・宗徳寺である。堀川通りから一筋西に入った通りにある。「箒」の「不動堂」のすぐ近くである。粟島明神は、江戸時代には女性特有の病気に効験ありと言われていた。「はだし詣り」に娘と行ったか、あるいは妻と行ったか、その帰途に「箒」の「不動堂」を通りかかって、というのであれば人間臭くて面白い。

(3) 京の水の藍より出て杜若

この句は、江戸出身の五雲が島原の不夜庵二世になったときの文台開きに、蕪村が祝儀として贈った句である。一見して諺の「青は藍より出でて藍より青し」を解釈の基とする。しかし、当句は諺のみ寄りかかって作句したのではなく、島原という地域性を趣向したのである。五雲は、遊郭島原の俳諧宗匠に就任したのである。島原は、洛中であるが、そのすぐ西のお土居の堀では、堀を利用した青物栽培が行われていた。藍の栽培も盛んであった。島原のある一

帯の村々の壬生・中堂寺・西七条・東塩小路・西塩小路・東九条・西九条・上鳥羽・下鳥羽で栽培されていた。「かり藍を七条塩小路の民家の門々にほしならべ」(『堀川の水』)て干し、その品質も「をよそ都の染屋形に東寺九条の藍を用いることは、染色青くしてうるはしく、他に異なる也」と染屋に重宝されたのである。

蕪村が五雲の文台開きに、「藍より出て」と言ったのは、単に「師を凌駕する」だけではなく「付近一帯が藍の産地である島原から」を含んでいるのである。藍はお土居の堀や堀川の湧水に育つものであるので、「京の水」が育てた「藍」は「染色うるはし」いのである。では、「藍より出て杜若」の「杜若」は何を表しているのだろうか。『安斎随筆』(伊勢貞丈)によれば、「江戸紫といふは杜若の花の色に如し。是葡萄染(えびぞめ)なり」とあり、葡萄染は、古今和歌集(八六七)に詠まれる「武蔵野の草」、ムラサキで染める。

句の意は、京の水で栽培された藍が京の水で洗われて師を乗り越えてくださいね、江戸出身のあなたも、ということになるのか。

島原の外も染むるや藍島(服部嵐雪・玄峰集)  
華やかな色彩を思わせる島原が、藍島に囲まれていたと想像するのはむつかしい。

京の農産物を詠んだ三つの句を示した。これらの農産物を蕪村が幼少時に育った家で生産していたなどと言うつもりはない。ただ、都会育ちでは眼のゆかない、興味を持たないものというものがあるのではないだろうか。そういうものとして上の三つの句を挙げた。農産物を詠んだ句を通して、蕪村の詩想の一面を表そうとしたが伝えられただろうか。

おわりに

蕪村は、三十六歳になって京都に来、十年目の五十五歳時に夜半亭二世を継ぐ。一世の早野巴人が亡くなってから二十八年目の襲名である。いろいろと心労の重なるような事はあったであろうと思う。几董宛の書簡に次のような文言が書かれている。

「何角に付京師之人心、日本第一之悪性にて候。日頃は左も不存候所、はいかいはじめて候て後、つくづくと思ひ合候事共多御座候。凡日本過半は行歴いたし、人心之善悪も掌をさすがごとくにあきらめ居申候。」(『蕪村書簡集』(二二)岩波文庫)

日付はないが、蕪村が夜半亭を継いだ明和七年から安永二年の間と推定される。几董が、社中の中から不満が出ていることを報せた返事の中の記事である。「なにかにつけ、京都の人心は日本第一の悪性だ」と京都人の悪口をいっているのである。よっぽど腹に据えかねたのであろう。上田秋成が、やはり京都へ来て住み始めたころ、

「翁が京に住みつく時、軒向ひの村瀬嘉右衛門と云ふ儒者が、京都は不義国じゃぞ。覚悟してといわれた。十六年すんで、また一語をくわへて、不義国の貧国じやと思ふ。」(胆大小心録)

と同じようなことを言っている。他国から来た場合、京都の人の気持ち理解できないのかもしれない。しかし、蕪村は几董という弟子が居たからこそ、京都で宗匠としてやってゆけたのだと思う。几董は、夜半亭一世早野巴人の門人であった高井几圭の次男で京都育ちである。几董の門人も多く、年齢は若い京都市人の納得できる人柄と、コミュニケーション力をもっていたのであろう。几董を夜半亭の後継者として認められた後、蕪村は二世を引き受けている。俳諧の才能だけでは宗匠としてはやってゆくことはできなかった、京都というところでは、と思う。几董という京都人を緩衝地帯として京都に向き合い、京都に育てられたのではないだろうか。

